

氏名	島田 滋
ヨミガナ	シマダ シゲル
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第752号
学位授与年月日	2024年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉可視化する音 〈作品〉sounds
論文等審査委員	
（主査）	東京藝術大学 教授 （美術研究科） 吉村 誠司
（論文第1副査）	東京藝術大学 教授 （美術研究科） 佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学 准教授 （美術研究科） 高島 圭史
（副査）	東京藝術大学 准教授 （美術研究科） 宮北 千織

（論文内容の要旨）

人の話し声、動物の鳴き声、街の騒音、世界は常に音で溢れている。音の正体とは何か。それは物体（発音体）の振動である。音（振動）が耳に入り、鼓膜を震わせ、電気信号に変換されて脳に送られ、聴覚が生じる。我々は生きていて、常に目に見えない振動を受信していることになる。音は視認することができない。視認することができないからこそ、注意力と想像力を働かせて音の正体を意識する時に、音の正体を認識できる。可視できないからこそ想像で補い、見えない物をイメージし、脳内で正体を作り出している。私は見えないものをイメージして作り出す行為は、自身の絵画を描くことに似ていると感じた。また自身の制作の中で音から感じる色やイメージ、図像などを、無意識に絵画制作に用いていたことに気づいた。

音楽は、音の波長や周波数、音の強弱や音色、リズムやテンポなどを用いて表現される。絵画は、色や形、線や質感、構図や空間などを用いて表現する。音と絵画は異なる芸術形式であるが、表現や感性においては多くの共通点がある。どちらの表現においても、共感や感情、想像が必要である。音と絵画を組み合わせることで、鑑賞者の感性をより深く刺激することができるのではないかと考えている。

音楽を聞いて映画のワンシーンが思い浮かぶ。音を聞いて思い出が蘇ることがある。過去に体験した情景や匂い温度まで感じることができる。このような経験を誰でも一度はしたことがあるだろう。そこには現実にはない美しさと儚さを感じる。音は記憶に強い影響を与えることが知られているが、それが自身の制作に大きく表れていることに気づいた。私のモチーフは、音によって想起される記憶の断片と音を作り出す形である。目には見えない音を可視化し絵画表現に転化させることで、新たな表現になるのではないかと考える。本論文では、音の絵画表現への試みを論述した。

本論文は3章で構成される。

第1章「音の輪郭」

第1節では、音から感じる美的感覚と、絵画から感じる美しさが似ていると感じることについて考察し、自身の幼少期の経験と、音楽のつながりについて述べた。

第2節では、日々の生活の中で感じる音と記憶との繋がり、視覚効果について述べる。

第2章「音楽の表現」

第1節では、音を具体的なモチーフにあてはめ可視化し、音を視覚的に理解することで、絵画表現につなげていくことができる可能性について考えた。音を可視化する様々な方法をあげ、自身の絵画表現に用

いる手法と過程を述べた。

第2節では、音楽から感じる自身の色のイメージをまとめた。

第3節では、イラストやアニメ、漫画などでよく用いられる表現や効果線、オノマトペを使い、より身近な視覚的な音の表現について考察した。音を絵画として表現するために様々な方法を用いた作品例を上げながら、意味と作品の中での効果を解説した。また音をモチーフとしている作品と、自作品の中で現れる表現の違いを上げ、新たな表現を導き出せないかを考察した。

第3章 作品解説

第1節では、これまで制作してきた自作品について解説した。

第2節では、提出作品「sounds」を解説した。そして終章で、今後の課題と展望を述べ本論文の結びとした。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、幼少時からクラシック音楽を学んできた筆者が、音楽から感じる色やイメージを絵画表現に生かそうとする試みを論述した創作論である。

筆者は小学校1年時から約9年間ピアノを習い、毎日練習していたという。また同じく小学生の時に初めて見て以来、たびたび見たオーケストラやオペラに夢中になったという。筆者にとって音楽は、音だけでなく振動や舞台景観をとまなう身体全体の五感の記憶としてあるのだろう共感覚ではないというが、筆者の中で絵画と音楽が様々な形で交錯し一体となっている様子を窺わせ、なかなか出会うことのない興味深い創作論となっている。

第1章「音の輪郭」では、筆者にとって音楽がもつ存在の大きさと、音楽の構成要素であるメロディー、リズム、ハーモニーについてそれぞれ説明する。それだけ音楽の影響が大きいのであれば、なぜ音楽ではなく絵画の道に進んだのかが不思議に思えるが、これについては簡単に、高校卒業後2年間引きこもりになり、そこでことばより感情や思考を形にする絵画が、自己表現の手段になったことを記している。

第2章「音楽の表現」では、「音の可視化」の方法として、楽器や楽譜、奏者といったモチーフや、マンガなどで多用される効果線、オノマトペなども有効であることを述べる。筆者の兄妹もピアノを習っていたらしく、家の中には楽譜が数多くあったという。他の様々な楽器も、音楽がモノや形になったインテリアのように室内風景としてあったようだ。それらが、「音の可視化」の具体的な手段や選択肢となっている様子が窺われる。

第3章「提出作品」では、これまでの筆者の作品と、提出作品「SOUND」について解説している。

筆者は音楽を聴いた時に浮かぶイメージを確認するため、ドビュッシーの「海」やムソルグスキー「小人」、マーラー「交響曲第5番」といったクラシックのほか、J-Popやロックなど様々な曲を聴き、カラードロワーイングのようなサンプルを作成している(第2章第2節)。おそらくまだ多くのサンプルがあるのだろう。自身の感性をみずから実験する様子は、探検や冒険のような未知の可能性への探索を感じさせる。独創性の高い稀少な論考として、審査員一同の高い評価を得た。

(作品審査結果の要旨)

島田は博士課程において、音の可視化に注目し、モチーフの選択や制作プロセス、表現技法を精査しながら制作と研究を一貫して行ってきた。

島田は小・中学生だった頃の9年間、ピアノを習い、家族でコンサートやオペラを見に行くことも多く、音楽が身近な環境にあったという。子供の頃から眼で見るものと耳で聞く音の関係性や重層性に魅了されていたことから、音楽の中の絵画的要素、絵画の中の音楽的要素を分析することによって、自身の絵画

表現を推し進めることを選んだ。

音楽をメロディ、リズム、ハーモニーの要素に分解し、それぞれに対応する美術史上の絵画作品を挙げながら、視覚と聴覚の特徴や傾向、相互作用の面から分析した。島田独特の観点で音楽と絵画の共通点や関係を再確認し、音を可視化するための色や形、構図、モチーフ、省略や比喩といった技法について考察を加え、制作の土台を整えた。

また、島田は修士課程において「国宝 信貴山縁起絵巻」現状模写制作に取り組み、その中で画中の人物や建物、山々や霞などの不規則な並びに、ドラムの軽快なリズム、ピアノによる跳ねるようなメロディを具体的に感じていたという。画中の造形が、その背後に表現される物語性や世界観とは別に、島田の記憶や感覚に働きかける実感を得た。この現状模写への取り組みを補助線として、音楽を感じさせる要素や仕掛けが平安時代の絵画から現代の漫画に至るまで用いられ続け、鑑賞者や読者に共感と楽しみをもたらしていることを示した。

提出作品「sounds」はクロード・アシル・ドビュッシー作曲「海 第2部 波の戯れ」をモチーフとした作品である。この曲は葛飾北斎作「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」に影響を受けたとされており、提出作品の制作は絵画から影響を受けた音楽を別の絵画として可視化する試みでもあった。

島田は曲のテーマである海や波を尊重しながらも、それらの具体的なイメージから距離をとりつつ、楽器が奏でる音そのもの、指揮者が作り出すハーモニーやリズムに注目して、何度も曲を聴いてクロッキーするところから制作を始めた。本画の制作においては、曲によって呼び起された幼少期の記憶を基に造形した指揮者や楽器奏者を取り上げ、クロッキーから抽出した形態を重ねて構図をまとめた。

曲中の音の高低や大小、演奏の緊張と弛緩を感じ取り、それらを色彩や抽象的図形を利用して表現した。加えて、漫画表現を応用した効果線や物理学のグラドニ図形を取り入れるなど、徹底した実験と挑戦の姿勢で制作にあたった。

以上のように提出作品「sounds」は表現内容と造形のねらい、制作方法の意図が明確であり、縦227.3×横436.5cmの大きな作品サイズも相まって、空間的な広がりイメージの奥行きを感じさせる迫力のある作品となった。

島田の制作と研究は、日本画画材を用いた表現を土台として、何をどのように描くのか、何を伝えられるのかという、絵画制作の本質を問い直す試みでもあった。その試みは提出作品「sounds」において実験段階を経て次の段階へ進んだ。日本画の表現や技法についての新たな発想を創出するために、今後の継続した制作と研究が期待される。

以上の点から、提出作品「sounds」は審査会において学位にふさわしい優秀な作品であると評価され、審査員全員一致で合格とした。

(総合審査結果の要旨)

島田君の論文は「可視化する音」という音楽と音による絵画への触発と影響そして共通性を論じている。音による波長や周波数、強弱や音色、リズムやテンポ等の解説と共に絵画における色や形、線や質感、構図や空間等との共通性を見出し自身の中で感じる共通性と一般論を比較し解説している。

音は記憶に強い影響を与えることが知られているが、それが彼の制作に大きく表れている。モチーフは、音楽によって想起される記憶の断片と楽器や音楽が作り出す色相や図像である。見えないものをイメージして作り出す行為が絵画を描く行為と似ていると感じ異なる芸術形式である音楽と絵画との共通点を考察している。音を聞いて色を感じ、メロディーから構図を考え子供の頃からの音楽の影響により楽器のモチーフを得て画面を構成し、絵画表現という形で可視化し転化させることで、新たな表現を導きだしている。

学部の卒業制作「かさね」で独特なモチーフと構成、独特な色使いで高い評価を得ている。

その後、大学院に進学国宝「伴大納言絵巻」の模写を完成させると共に、修了制作「夜のしじま」で芸

大買い上げとなっている。

この頃から、音楽を聴きその発想を制作の源にして来たと言う。博士課程に入り、更に音楽的な表現を深めていく。

和音が見せる色相を絵画として模索し、岩絵の具を何度も塗り重ねては洗い落とす技法を取り入れ、奥深い色を出すことに成功している。また、和音をイメージする事で画面上の異なる二色の色を響かせ、美しい色彩画面を構築している。

そして その斬新で独創的な構成により院展に連続入選し、賞候補にも挙げられている。

「様々な分野の芸術表現を絵画に取り入れる事で 新たな表現を創造していくことが出来るのではないかと考えている。」という彼の試みを今後、見守りたいと思う。

作品と論文の整合性もあり、審査全員の協議の結果合格とする。